

## 平成 29 年度「第 3 回ケアラーサポーター育成研修」開催報告 地域に学び、地域でささえる ～ケアラーを孤立させないために～

【日時】平成 29 年 11 月 22 日(水)16:10～17:40

【場所】長崎大学文教キャンパス 環境科学部 1 階 A13 教室

【講師】上村 真紀 氏 (医療法人厚生会 道ノ尾病院)

太田 栄子 氏 (家族介護者)

平成 29 年 11 月 22 日(水)、長崎大学文教キャンパスにて、「第 3 回ケアラーサポーター育成研修」を開催いたしました。当日は、学内外から 30 名の参加がありました。

平成29年度 第3回ケアラーサポーター育成研修

長崎大学

平成29年  
11月22日(水)  
16:10～17:40  
(開場/16:00)

会場  
長崎大学文教キャンパス  
環境科学部1階A13教室

対象  
一般(地域)の方  
長崎大学学生・教職員

講師  
上村 真紀 氏  
(医療法人厚生会/道ノ尾病院  
作業療法士)

太田 栄子 氏  
(家族介護者)

若年性認知症とともに  
当事者の苦悩と希望をみて  
家族を介護して見えたこと

地域に学び、地域でささえる  
～ケアラーを孤立させないために～

参加費無料  
其事前に申込みのみに限ります。

お申し込みは要領書をご覧ください。  
電話でのお申し込み、FAXでのお申し込みには、要領書の印刷と送付が必要です。申し込みフォームもダウンロードできます。

主催  
長崎県、長崎市、長崎県医師会、長崎県介護福祉協議会、長崎県社会福祉協議会、長崎県老人福祉会、長崎県障害者福祉協議会、長崎県障害者就業・生活支援センター、長崎県障害者自立支援センター、長崎県障害者相談センター

協賛  
長崎大学、長崎大学健康センター

TEL: 095-819-2179 (内線: 2179) FAX: 095-819-2159  
MAIL: ota@www.nagasaki-u.ac.jp http://www.nagasaki-u.ac.jp

### 講義「若年性認知症とともに」当事者の苦悩と希望をみて 上村 真紀 氏 家族を介護して見えたこと 太田 栄子 氏

上村先生は、冒頭に、太田さんと家族との出会いを含めての自己紹介をした後、若年性認知症について、原因となる病気や症状を詳しく説明されました。若年性認知症は働き盛りの世代で発症するため、本人だけでなく家族の生活への影響が大きいにもかかわらず、その実態は明らかでなく支援も十分ではないことや、社会的にも大きな問題であるが、企業や医療・介護の現場では未だ認識が不足している現状であることを述べられました。また、高齢者の認知症との違いについても詳しく話されました。

若年性認知症の家族と15年以上生活し、介護している当事者として太田さんに生の声でお話しいただきました。今振り返ると、若年性認知症になったご主人の行動の裏にあった心理的訴えや、若年性認知症の当事者に寄り添うとはどういうことか等考えることができる。しかし、当時は一生懸命で毎日喧嘩の繰り返しであったなど、認知症の方への対応としてやってはならない3原則と言われる①否定しない②怒らない③責めない、をずっとご主人にやっていたと話されました。医師や専門職の方々から、当事者に寄り添うよう言われていたが、「介護者である自分にも寄り添ってほしい」と日々思っていたことも打ち明けられました。家族は若年性認知症やその対応方法、病気がわかった後の生活や経済的問題等、何の知識もないまま突然訪れる状況に戸惑い、悩み過ごしていたこと、家族だけではなく当事者も葛藤があり、主人は家族よりも辛い思いをしたのではないかと話され、十分な精神的支援が必要であることを訴えられました。

太田さんは冒頭で、希望はないが願いはあるとおっしゃいましたが、ご主人が病気になり、発語がなくなり、自分で動くことができなくなっても、本質は昔と変わっていないことを最近よく感じるとおっしゃいました。そのご主人の本質をこれからも大事にしていきたい…と述べられ、これが専門職の方から見た希望であることを上村先生は強調されました。



また、機能障害で話ができなくなったとしても、耳は聞こえ、理解できていること、周囲はただ発語ができなくなったということ、心情面はいつまでも残っていることを頭に入れたうえで、声かけや接することが大事であると上村先生は強調されました。

太田さんは「人生において認知症の人の介護はどのような意味があるか」について、現在は平穏な気持ちで過ごすことができていること、認知症の人と家族の会に所属し活動していること、主人の介護保険サービスや行政のサービス等多くの人に支えられて生活していることを実感していると述べられました。夫が認知症になり、自分の人生の軌道修正をすることになったが、介護を通していろいろな経験や多くの方との出会い、夫への無償の愛情を自分で自覚することができるようになった。これらは、介護のお陰であると日々感じ、夫からもいろいろなものをもらっていると感謝しながら生活している。主人が心身ともに安楽でいられるような環境を整える努力をこれからもしていきたいし、自分の心身の健康が続く限り、在宅での現在の生活を続けていきたいと話されました。

周囲のみなさんには、直接的な援助をしてもらうのではなく、「体調はどう？頑張っているね」等の声をかけてもらうだけで心が助けられる、ちょっと気にかけてもらえるだけで気持ちが楽になる、嬉しい気持ちになると家族介護者の気持ちを述べられました。

上村先生は、認知症は「誰もが、いつかは」と考えれば、認知症の方にも、介護している家族の方にも、もう少し優しくできるのではないかと思う。太田さんが講演活動していた際に、ケアに必要なものは「やさしさとおだやかさ」と言って講演を締めくくっていた。太田さんに教えられた言葉と紹介し、若年性認知症当事者として講演活動をされ、10年間の軌跡として出した本の紹介をして締めくくりました。



第3回ケアラーサポーター育成研修には、多くみなさまにご参加いただきました。センタースタッフ一同、心よりお礼申し上げます。アンケートでは「太田さんの愛情と前向きな考え方が素晴らしかったです。自分のことを振り返り、考えさせられることが多くありました」「家族介護当事者の具体的な話は真実味があり、とても興味深く聞かせてもらいました」「上村さん、太田さんの掛け合いに、お2人の信頼関係の強さを感じました」「お2人のかけあいが、共に歩んだ証と思いました。笑顔で話ができる介護を目指したいと思いました」「若年性認知症になったとしても一人の人なので思いやりを持って接するべきだと感じました」など、多くの意見やコメントがありました。アンケートへご協力いただきましたみなさま、ありがとうございました。

長崎大学ダイバーシティ推進センターは、今後も引続きケアラーサポーター育成研修を開催します。今後ますます介護の課題を抱える人が増加することが確実視されているなか、介護者が孤立することなく介護者も要介護者も共に社会参加ができるよう、地域のみなさまとも取り組んでまいります。